ブラジルにおける日系移民のまちづくり

――サンパウロ州レジストロでの事例研究――

正会員　工博　大阪大学助教授　盛岡　通

URBAN DEVELOPMENT AND COMMUNITY MANAGEMENT BY JAPANESE IMMIGRANTS IN A COLONY IN BRASIL ――――

A FIELD SURVED IN REGISTRO SP. KNOWN AS A TYPICAL PLANNED COLONY

by　　Tohru MORIOKA,　Dr. Eng.
Associate Prof. of OSAKA University,
Dept. of Environmental Engineering

ブラジルにおける（日系人の最初）の計画開拓地であるジストロのまちづくりには、通史的に見てエポックがある。まず、開発会社海興による植民管理的、状況対応主義的なまちづくりがなされた。つぎに、1930年頃には植民自治団体郷を主体としてむら社会の秩序をともなったまちづくりがなされた。むらびとのほかにも、街の商人、海興の勤め人や青年達のつきあいが広がり、市街地解放とともにさらに商店も増加し，社会施設も整備された。

このブラジル社会のまちびとは戦後のまちづくりにも活躍した。それはRBBCというソシエダーデを核として、まち隨一の会館やスポーツ・センターをつくり、農村電化事業などをも推進したことである。現在は行政によるまちづくりが主であるが、それも日系人のまちづくりの履歴に影響されているところが少なくない。

伊系、独系移民都市と比較すると、日系移民都市では学校、自治組織の寄合所、産業組合などが街の中核施設となり、つきあいも多重的階層型であったのが特徴である。また、つきあいの社会化とそれにともなう都市施設の建設はどの都市でも共通するが、日系移民都市においてはむら組織とその影響がまだ残るソシエダーデを通じて関与してきたことが見落せない。

（キーワード）まちづくり、日系移民都市、事例比較研究

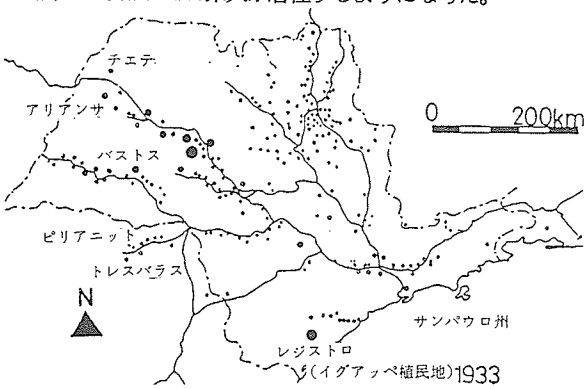
1．日系移民都市の系譜とレジストロの位置づけ

日系移民は農業移民であったが、彼らの集住地のいくつかは小都市へと成長したし、離農した人々や子孫が多く移り住んだ都市の一角では特色あるまちづくりがおこなわれた。ブラジル社会において、移民たちの伝えた日本的生活文化は変容をしていったが、その重要な一要素であるまちと環境のつくり方、営み方の特性とその変化の過程を考察することが本論文の目的である。

まず、日系移民の集住地がまちに成長した背景とその代表的な類型について簡単にまとめてみる。

①移民会社の通訳、監督や資産家による土地の購入と日系人への分譲により、「共同開拓植民地」が形成された。パイオニアや鉄道各線のコロノにとってもユートピアであった。
②大正期、植民を国家的施策として組織的・計画的な植民地開発が開始された。この「計画開発植民地」には、官製植民地と拓植組合経営植民地の２つのタイプがあった。レジストロは前者である。
③奥地の農村の衰退により、大都市周辺に人々が移り住んでできた日系集住地がある。この「自然成長型集住地」はサンパウロなど都市への基地として、大都市で活躍する多くの人材を育てた。
④もともと、集住地の大部分は農村であった。初期のむらづくりのスタイルは、入植と営農の形態の影響をうけた。この集住地でまちが成長する過程でも、類型ごとに異なった条件が作用している。集住地のコミュニケーションの組織的特徴は、３つの類型の順に、支配的核としての日本語学校（①）、教育組織と自治組織と産業組合との多様な分担（②）、出荷を通じた産業組合への結集（③）にある。
⑤「共同開拓植民地」の大部分は、日系人の多いまちには成長せず、奥地衰退の波に消えた。「共同開拓植民地」では、初期には意識的な都市核の配置や各種施設の建設がなされなかった。踏みわけ道とほぼ中央に位置する小学校が特徴的である。
⑥「計画開拓植民地」では、農地区画の分譲とは別に各種サービスを提供する市街地が設定され、建設整備がなされた。街区パターンをみるとレジストロが港からの２本の街路が骨格となっているのに対し、バストスなど以

後の開発ではグリッドパターンが採用されている。学校、医薬局、寄会所、開発事務所、教会などの公共施設、アルマゼン（初期の雑貨店）や各種の民間施設の立地とそのつくり方にも、のちに述べるような特徴があった。
⑦大都市近郊の「自然発展型植民地」では、非日系人のまちづくりへの関与が相対的に大きかった。いわば、ブラジル社会の方法で市街地の骨格がつくられて以後に、農地から離れて日系人が居住するようになった。



図―1　日系人集住地（1930年代）と計画開拓植民地

レジストロは1913年、海外興業株式会社（海興、当初の名称は東京シンジケート、ブラジル拓植会社）によって、サンパウロの南西 200km弱のところに開設された。このまちづくりには、日系人の技術的・文化的貢献がとりわけ顕著である。「純粋培養」に近いとまで言われ、日系社会内部の政治経済的力学が、ながくこのまちづくりにそのままかかわってきたのは、当初の植民地の地理的条件と開発過程によるところが大きい。そのまちづくりの初期の背景をまとめると次のとおりである。

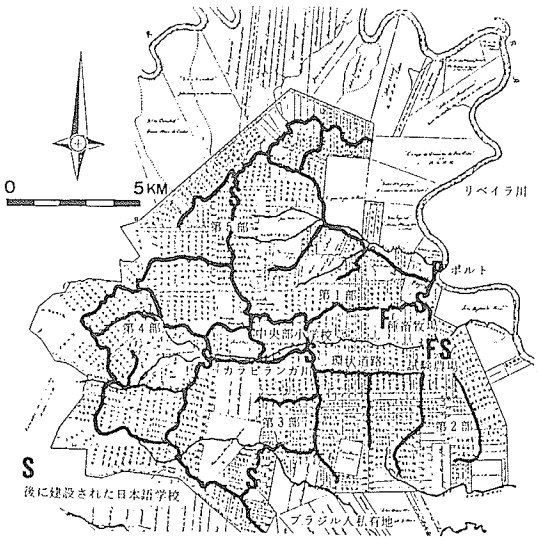
①レジストロの気候は温暖湿潤で南西日本のそれにやや近く、低く屈曲の多い山なみと川沿いの低地は日本のそれへの共通点があった。米作を営農の中心におき、さとうきびから酒を醸造するスタイルは、後の茶、い草の栽培と加工へと成長していった。
②1919年の小学校の備品目録には、発電機の模型をはじめ多くの備品がみられることに代表されるように、レジストロは外務省の指導下の国策的なモデル植民地であった。精米所や産業組合倉庫建設などへの補助金の支出などでは、戦前を通して他の集住地より群を抜いていた。逆に、植民者の自主的姿勢との衝突や官僚的植民地経営をまねいた。
③植民は約25haの土地を購入し、土地持ち農家としての平等な戸と戸の関係からつきあいをスタートさせた。のちに、家父長制的家族制度を内部にもちながら、戸主を会員とする自治団体「レジストロ郷」が発展したが、それも異色の「社会実験」であった。

2．レジストロ開拓地のまちとむらの建設プラン

開拓地のインフラとしてまず整備がなされたのは道路である。図－2は道路とロッテ（敷地）の配置を示す。

ついで、むらの共同施設として整備されたのは、植民の希望の強い小学校（1919年）であった。むらの建設プランの特徴をあげると次のとおりである。

①環状道路から放射状道路を伸ばして、植民地の各地区を結び、人とものの流れのポルトへのアクセスを確保した。踏みわけ道を利用する他は、短冊状の敷地を振り分けながら谷あいに道をつくった。
②幹線道路を共通に使うという一体性を重視して、開拓地を5部にわけ、さらに1つの部を4～5に分割して、約20戸で構成されるむらの基礎単位区をつくった。水利慣行に基礎をおく社会関係と異なり、道路維持を共通の課題として生み落とされた部（大字に相当）のコミュニケーションは、その後の「日本むら建設」の拠点となった。
③道路の技術基準は、2頭だての馬車が運行できることであり、コンパスとチェーンを用いた測量で位置を確認して用地境界に木杭を打っていった。開拓ロマンティスト大野長一の指導のもと、活気にあふれていた測量隊の若者たちがまちの最初の住民であった。
④レジストロの集住地としての基盤整備は、初期には土木技術者によりなされたが、その資質は図－2にみるようにブラジル人私有地の残る開拓地での巧妙な道路ネットワークに生かされた。水利施設は1930年代に基礎調査がなされたのみであった。

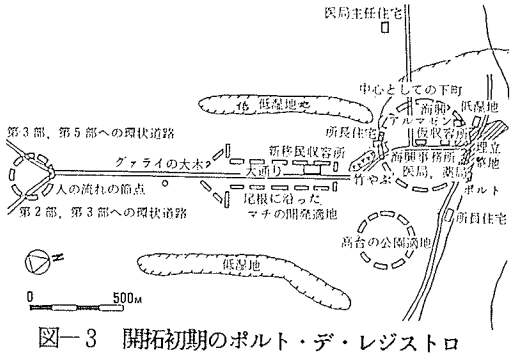


図―2　レジストロ植民地の敷地と道路

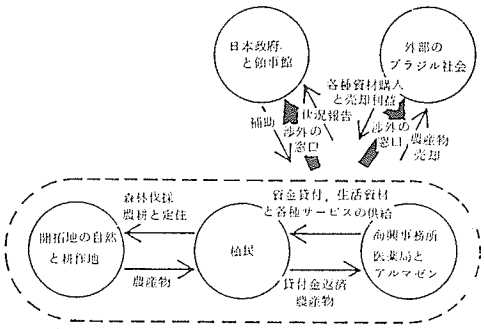
レジストロ開拓地の初期の計画にも、むらとは別にまちの建設が意識されていた。その初期のまちの核は、物資流通の基地であるポルト（港）、植民地経営の実質的窓口である開発事務所、日用品を供給し農産物を買いとるアルマゼン、医療保健サービスの拠点医薬局、一時収容施設でありホテルや公会堂の機能をもった移民収容所であった。

初期のまちづくりは海興の現地事務所で草案がつくられ、実行にうつされた。その特徴は次のとおりである。

①ポルト・デ・レジストロ（P. de Re.）の86haの買収地区（後に拡大）をながく海興の直轄地とし、市街地解放は1935年までなされなかった。海興業主体のまちづくりで重点がおかれたのは、低湿地の埋立と港の建設であった。
②港から小さい尾根をのぼる道が、のちに「大通り」としてにぎやかになる。しかし、1910年代には図－３に示すように港のごく近辺のみに建物が見られた。２本の街路の配置と名称がまちづくりの文化的特徴を示している。環状道路への分岐点の先に海興直営の種畜場と試験農場を設置し、植民へのサービスをおこなった。
③まちは植民地の中心から偏していたこともあり、学校を建設することは当初は計画されていなかった。先に示した施設の機能をみても、P. de Re. は植民たちがたまに出てくる空間であり、日常的な生活空間としては使われていなかった。それは後に図－１４に示す分野別の生活の舞台にもあらわされている。
④海興の期待した開拓のイメージは図－４のようであり、まちの主人公ではない植民に対して外界との窓口となった海興は、都市サービスも全面的に担った。アルマゼンや収容所の機能が一般商店やホテルによって代替されるまで数年を要した。



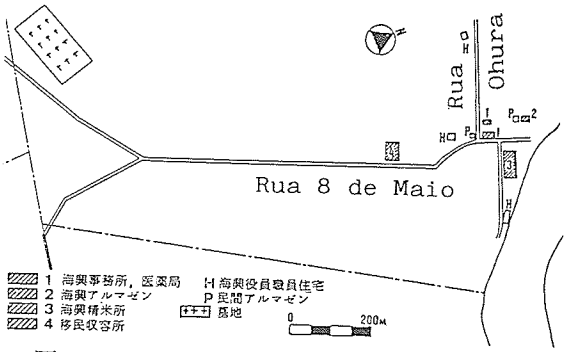
図―３　開拓初期のポルト・デ・レジストロ



図―４　海興の期待した開拓のイメージ

さて、1919年の天長節の日、海興現地事務所と植民とが協力して、移民収容所で共拓会の発足会が催された。この植民地運営団体の主要事業は、道路維持、教育、衛生、産業振興であり、やがて戸籍事務や郵便事務の取扱いも代行した。共拓会は海興事務所に間借りの形であり、その役員会議は中央部小学校で開催されたことに示されるように、植民地運営への植民の参加がまちづくりをともなうところまでゆかなかった。むしろ、海興の手で墓地が開設され、ブラジル一の精米所が設置された。

新たにまちに定住したのは、海興の職員と数少ない商人であった。まちとむらを結ぶ車輌組合が植民の知恵でつくられて、社会サービスの運営主体を民間で工夫して組み立てることが始められた。施設の建設まではゆかないが、居宅や青空の下でまちのコミュニケーションが芽吹きはじめた。医師北島研三らのキリスト教の集い、同夫人の日曜学校、事務所横の広場でのスポーツ、種畜牧場での青年会の集いなどであり、これらは、次期のまちづくりのニーズとして収れんしていった。



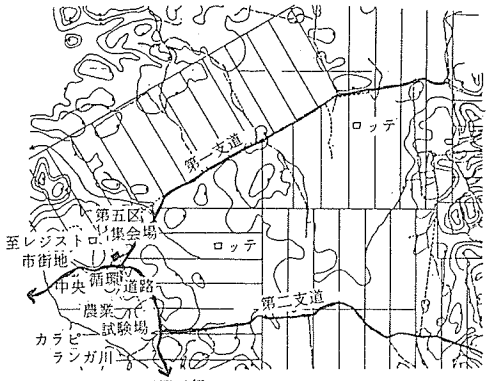
図―５　開発後数年のポルト・デ・レジストロ

３．植民地のむらづくり ―― むらの変容

植民地に一時代を築いたレジストロ郷は、まちに事務所をもっていたが、本質的にむらの組織であると著者は性格づけた。このようなコミュニケーション形態を引導したのは、共拓会の時代に方向づけされた部や区でのむらの集住基盤施設づくりとコミュニケーションであり、その特徴は次のようにまとめることができる。

①近所の親しい家族の間では、農産物の出荷や葬式で手伝いがあり、住宅の建設でもトロカジーヤ（手間がえ）という方式で協力しあった。しかし、散村形態のため、共同施設の立地をめぐっては利害が対立する条件にあった。
②道路維持などの懸案事項を話しあう集会所が、図－６に例を示すように、道路の分岐点などにつくられた。このようなむらのセンター候補地は道路と敷地の配置の計画の時点から推定されたが、海興はその用地を保留地とせず、むらの話し合いのもとで不運な所有者の提供にゆだねられた。
③道路維持などは区ごとになされたが、通学可能圏との関係で小学校が各部で運営されると、むらのコミュニケーションは、区と部と共拓会という三段階構造をもった。家の戸主の参加する垂直型の属地的社会関係が成立したのである。ここではソルティロ（独身者）や戸主の弟（既婚者でも）は正式なつきあいの軸から離され、この人々は青年会をつくってブラジル語を学んだり、のちにま

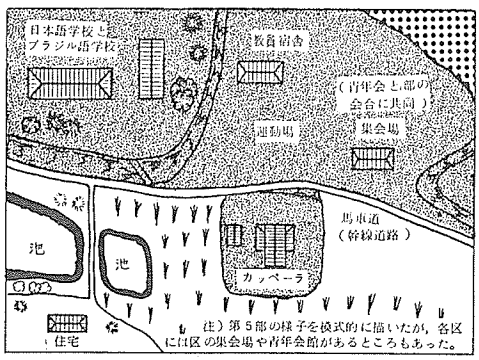
ちに出てきて商売をはじめた。まちづくりの主体の源であった。



注）道路は 1980 年の時点での配置が図示されており，開拓初期には第一支道と第二支道とを奥で結ぶ道はなかった。第五区集会場はのちに第二部小学校に転用。

図―6　むらのロッテの配置と集会場

レデストロ郷は、1924年に成立した。植民の自治により開拓地を運営していくという原則が確立した時期である。家長で等級別に経費を負担したものを公民とし、公民の互選で区長、部長、郡司、助役ならびに郷議会議員を選出した。明治の気骨を感じさせる精神主義、経費負担者の範囲内での平等主義、家父長制的な運営方法に特徴がみられる。教育、産業、道路維持が三大懸案であったが、道路維持が定例行事化（年２回の総出の補修と大規模工事への海興からの補助）し、産業政策が1928年設立のレジストロ産業組合の手にゆだねられるようになると、郷制度下の自治は部の単位の小学校教育を中心としたものに比重を移していった。小学校教育と道路維持をめぐってむら社会からの除名さわぎが生じるほどであり、むらの規律が確立していった。郷時代のむらのセンターとコミュニティ施設の配置の一例を図－７に示す。



図―7　郷時代のむらのセンター

4．「レジストロ郷の時代」のまちづくり

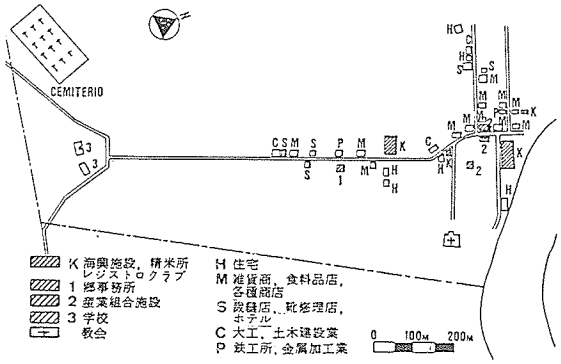
植民地開設後20年近くなると、P. de Re. には商店やサービス施設がかなり立地してきた。図－８のように、雑貨店、日用品店、裁縫店、くつ屋、ブリキ屋、散髪屋、ホテルなどが下町を中心に点在していた。公共的施設としては、産業組合事務所と新築倉庫、カトリック教会（1926年）、新しい郷事務所（1932年）、公会堂的役割をはたしていた旧移民収容所などがあった。この他、屋外の施設としては、ポルト近くの広場、海興事務所裏のグラウンド、旧収容所近くの広場と相撲場などがあった。この時代のまちづくりの特徴は次のとおりである。

① SITIO REGISTRO が、購売、親睦、レクリエーション、宗教などのつどいの場として人々を集めるようになり、そこで得られる社会サービスの種類も豊富になっていった。そこでは居住地の属地的制約や家父長制的統制の強い面と逆にそこから離脱しようとする反対の傾向が併存していた。

②カトリック教会は、ブラジル社会への非同化を憂慮する海興の積極的なとりはからいで着工し、公園とする予定であった高台に日本人建築技師田中亮三の監督で完成した。その信者たちのあつまりは属地的ではなく、むしろ都市的な自由な雰囲気があった。幼稚園（1928年）、パードレー・フェデリッコ学院（1933年）を開き、教育面でも郷組織の外部でサービスを広めていった。

③とはいえ、むら社会の秩序も強化され、まちのサービス機能を「戸と戸の関係」に沿ってコミュニダーデのもとに治めていった。電話を敷設し、補習学校を建設し、さらに納骨堂や病院の建設も日程にのぼっていた。

④レデストロ郷の事務所は街にあったが、それは区、部という組織の順序だてたつきあいの頂点としての存在であり、そこに植民がX部Y区の標識なしに出入りすることはなかった。街では青年会の集まりがホテルでなされたり、教会は独自の信者組織をもったのに対し、農村部ではより一体性が強かった。すなわち、宗教、青年会、部の諸活動が、図－７に示す空間的至近性以上に結びついていた。それは、日語学校父兄会、部会員、カトリック信者組織、青年会指導員の組織の構成が重なりあっていたことと対応している。



図―8　入植後２０年のレジストロ市街地（1933年）

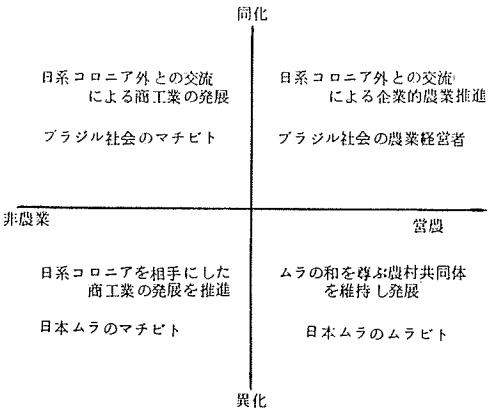
むら社会の束縛をはなれて、まちに自由なつきあいを

発展させたのは青年、とりわけ海興、学校、産業組合などに職場をもつ青年であり、郷の組織から疎外されていた人々である。やや時期はおくれるが、渡伯時の構成家族としてきた弟や甥たちも脱農して小規模な商いをしたり、簡単な都市サービスに従事した。

最も典型的なまち型の組織は同人雑誌「先駆」に集まる青年連盟であり、部の幹部たちと対立する論調をはることもしばしばであった。彼らはブラジル社会の司法、行政、商取引などにブラジル語でかかわった。レジストロクラブ（旧収容所を改造）でダンスを楽しみ、結婚式も催された。

1930年ごろの農業不況は経済的にも農村の役割を下落させ、消費材とサービスを供給する街の相対的比重が高まった。寄生的に生まれた街、開拓地を管理する最低限の機能から出発した街が、植民地開設20年にして、むらとは対等で独自の発展をなしてきたのである。

日系人に対してブラジル社会への同化を強制する波のもと、まちとむらでの対立するコミュニケーションを象徴的に示したのが図－9である。街での社会的サービスを4つのタイプのいずれの人々も享受したけれども、サービスをする側にいたのは、第4のタイプ（ブラジル社会のマチビト）であった。



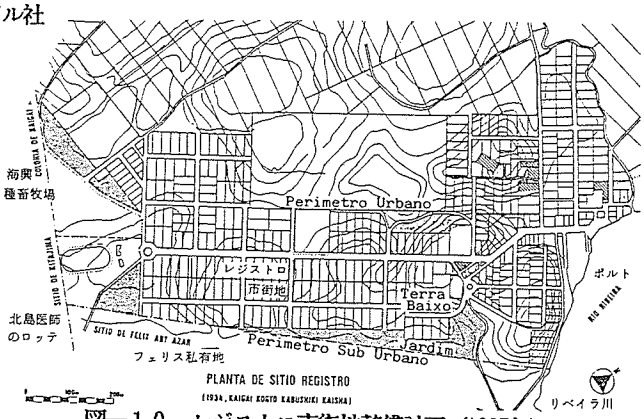
図—9　レジストロの対立する志向と行動

1935年にいたって、海興は市街地の土地を売りだした、この解放計画の背景には、外国人規制を強めつつあったブラジル社会の動向、海興の財政基盤確立への意向、非日系人を含めて市街地での居住を希望するものの増加、があった。

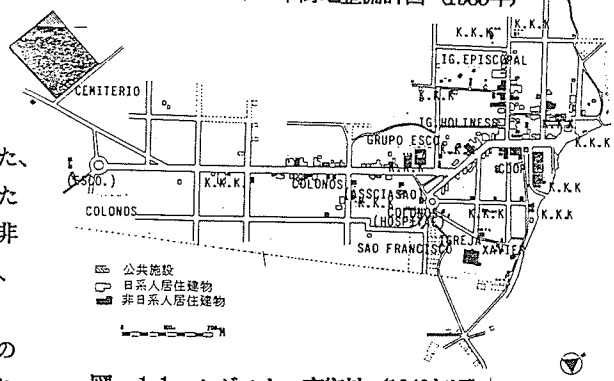
市街地整備計画は現地事務所で立案され、東京本社の了解のもとに実行された。計画図は図—10に示すとおりで、その特徴は次のとおりであった。

①2本の直交する主要な街路に沿って市街地を形成させることを基本とし、この通りに沿って主要公共施設や各種の店を配置した。
②高台の教会を強調する町割は採用せず、それへのアプローチ道路は支線であるため、教会とその広場が市街地の空間的な核になりえなかった。ポルトのそばの公園、レジストロクラブ前と小学校の前のロータリ型公園が設けられた。
③市街地の電灯施設、雨水排除施設などが整備され、計画策定時には住居地域、商業地域、工業地域を設定して、土地利用の誘導をはかることが試みられらた。
④上町の繁栄のために商店の誘致をはかる一方、不便な郵便局を下町に移築することが想定されるなど、いまだ下町に重点がおかれた。これは物資のすべてがポルトに陸上げされていた経済的背景による。みなとまちレジストロであった。
⑤綿密な財政計画をもち、敷地売出しの標準価格は6つの等級にわけられ、利益の計上を予定していた。
⑥現地事務所所長に計画構想として「市街地売出しの必要なる理由」7項目、必要な都市施設13種、地区別土地利用の4つの留意事項を整理して手渡したのは広田英郎であった。彼は都市計画には素人同然であったが、財政計画を立案した。整備計画図を作成したのは、市街地の電灯施設工事を指揮していた田中亮三である。

市街地解放の結果、多くの商店や住宅が軒をならべることになった。売出し数年後の市街地の様子は図－11に示すとおりであり、日系人の所有地が多かった。



図—10　レジストロ市街地整備計画（1935年）



図—11　レジストロ市街地（1940年頃）

5．ブラジル社会のなかのレジストロへの再編成

1939年、海興はレジストロの海興所有の財産のうちで産業施設を除いて共済会（郷の後継団体であり、また医療共済団体として登録）に譲った。しかし、共済会に対するブラジル政府の取締りも強くなり、結果的には解散させられた。このため、日本むらの組織的動きは不可能となり、その分だけ同化を志向する人々やブラジル生まれの二世の活動は相対的に比重が高まった。戦争の間、まさに日系社会は縮んでいたのだが、この間にのちに街の主役となる二世たちの社会適応能力が高められていたと言える。

このような推移からみて、戦後の街でまず、青年の集まりからコミュニケーションが広がってゆくのは当然だった。共済会の再発足に先だつこと4年前の1947年に非日系人をもメンバーとする野球クラブRBBCが創立された。ブラジル法にのっとた法人組織であり、部分的だがブラジル社会にも開かれていた。一世が中心となって再建した共済会や後のレジストロ文化（体育）協会は正式の団体としては登録されておらず、現在にいたっている。戦後のまちづくりの特徴をコミュニケーションの面から整理すると次のとおりである。

①RBBC会員のリードで青年たちは野球を楽しみ、創意と工夫により地位を高めていった。解散したツピー（茶業組合）の所有地を丹念に手入れして野球グラウンドとし、この財産をもとに現在のRBBC会館、スポーツ施設を整備してきた。生き生きとした自主的なボランタリズムがあった。また、そのしたたかさはまちでの非日系人を含めた自由なコミュニケーションの産物である。
②まちづくりには資金を含めサンパウロ州等からの有形無形の援助がいる。青年たちの友人である非日系人のコネクションと名付け親制度などのカトリック社会のつきあい関係を最大に生かして、援助の請願が実を結んだ。道路局のブルドーザの貸与から農村電化事業まで、外部との折衝の窓口はまちの青年が持った。
③この過程でミニシピオ（戦後行政区として独立）の政治、州の政治に係わってゆくが、経済基盤を掌握しているほどには、日系人が政治の方向づけをできなった。このため、戦後のまちづくりは基本的に日系社会の意向にはあまり関係なく行政主体に進められた。
④すなわち、一部小学校と補習学校跡地はそのまま接収されて市庁舎や裁判所となり、その後、電信電話公社などが立地するビジネス地区となった。恩賜病院跡地はバスの発着ターミナルに、旧レジストロクラブ（公会堂）跡地は小学校と水道局に利用された。まちの中心が日系人の多い下町から上町へと移動したこと、国道の開通とともに市街地が南と西方向にひろがったこと、既居住地を避けたために公共施設は旧海興所有地に配置されたことなどが60年代の特徴である。
⑤レジストロ50年祭が実施されたおり、レジストロ開拓の生みの親－青柳郁太郎の胸像が中央公園に設置され、あわせて公園も設備された。日系人組織の財産がほとんど皆無となったなかで、この公園は数少ない日系人のまちづくりの営みを伝えてくれるものであった。

6．現在のレジストロの市街地

レジストロの都市空間は、図－１２に示すように、昔の大通りを軸として、上町、下町並びにその周辺の住宅地からなっている。日系人の街でのつきあいは大通り沿いでくり広げられている。その場所としてはRBBC会館、日系人が得意客のバール、日系人の経営する事務所、商店などである。農業者はコチア農業協同組合の建物に集まり、キリスト教や仏教の信徒はそれぞれの教会やお寺に詣ている。

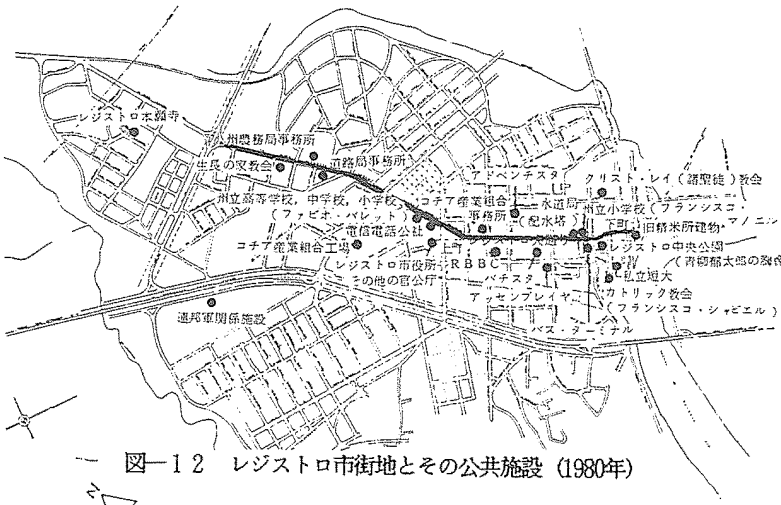
市街地売出しのとき以来、大通りをはさむ土地が多く日系人によって所有され、大通りが折れる点までは、現在も日系人の姿が多い。図－１３は上町の中心部の土地利用変化の例を示す。斜線部の１階には服地、衣料の有力チェーン店が進出してきているが、表通りに店舗用空地がないため、日系人から借地をしているほどである。

現在の市街地でのまちづくりの特徴をまとめておく。

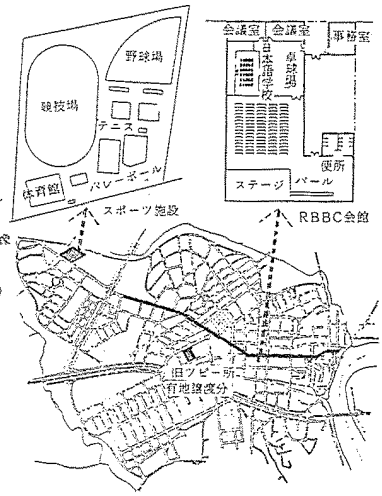
①大通りAve. Fernando Costa は尾根筋にあるため、国道沿いの諸施設と大通りのそれらとが結びついて発展するのを妨げている。大通りと直交する方向に商業施設やサービス施設がにじみ出してゆくことは少ない。この一次元的な都市軸がレジストロの変らぬ特徴である。
②国道の東側、墓地の西側、州道を越えた地区に住宅開発が進められている。これには日系人所有地のロッチャメント（宅地の分割と整備）が大きな役割を果たしている。対照的にシリア系移民の所有に端を発した地区は地権が混乱しており、街路や排水なども整備されていない。
③レジストロ市は水道局の北の谷に体育館兼ホールを建設し、この遅れた地区の開発を急いでいる。戦前に海興が排水管を埋設するなど苦戦した地区で、以来40年近く経て再整備が着手されたのである。この谷の街路に沿って都市サービス施設を誘致することができれば、市街地の集積に二次元的な厚みを加えることができる。
③レジストロにおいても行政サービスの比重が高まってきており、旧来のコミュニダーデ（地縁的コミュニティ）やソシエダーデ（任意加盟の特定目的型組織）の地位が低下している。しかし、RBBCはレジストロで唯一の会館やスポーツ施設ももつソシエダーデとして羨望の的である。多くの非日系人も運動施設利用会員として利用しており、そのバイレは広く人気を呼んでいる。
図－１４のスポーツ・センターの建設は市街地西部に新しい核をつくり出している。
④市街地では日系人のまちづくりを語る建築物や景観が次々と消えている。初期の名大工の建てた軽快さを感じさせる入母屋づくりの家も取り壊され、望楼のある寄棟づくりの木造住宅一棟が目立つ程度である。しかし、レンガづくりの精米所や少し時代は下がるが百貨店の先覇をつけたバルコニーのある洋式店舗併用住宅に加えて、周辺農村の和風二階建住宅の景観を重ねると、日系人の所業が印象的である。

7．レジストロでのまちづくりの機能的、文化的特徴

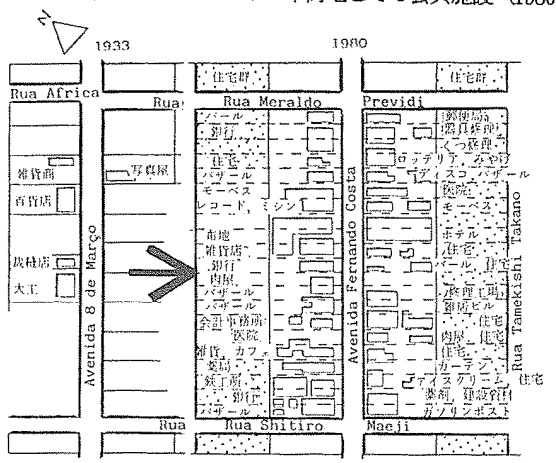
レジストロのまちづくりの特徴は、通史的、比較論的には次のようにまとめられる。



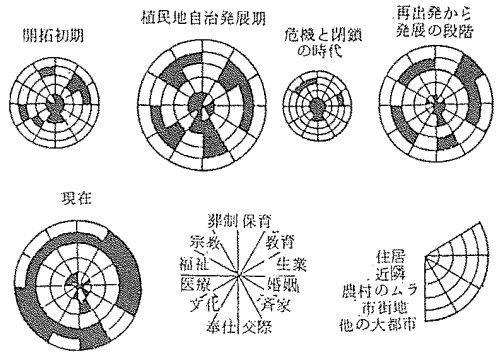
図―１２　レジストロ市街地とその公共施設（1980年）



図―１４　ＲＲＢＣ会館とスポーツ施設



図―１３　レジストロ上町の土地利用変化の例



図―１５　生活とつきあいの空間の変容

①むらに本拠があった時代を含めて、12の生活分野ごとに生活空間の変化を示したが図－１４である。ほとんどが住居のなかで営まれる生活様式から、部分的に近隣コミュニティに委ねられ、さらに街の機能によって代替され、生活様式の多様化を支える空間的機能分担が進行した。この傾向は大筋では日本国内と差異はない。しかし、日系人が言葉を始めとする日本文化を共通の媒介項として意識的に編みあげてきた「むらの組織」やソシエダーデを通して、コミュニケーションの受皿である都市施設を用意してきたという質的意味あいは厳に区別される。むしろ、高度化する生活ニーズはある程度の都市的集積なしには充足されず、周辺の小規模日系集住地が崩壊するなかで、レジストロがリベイラ川流域の日系移植民への都市的サービスをおこなえるほどに成長したことに意義がある。街に銀行支店が８つもある源泉は、茶、バナナ、い草の三大産業を握る日系人の経済力にある。

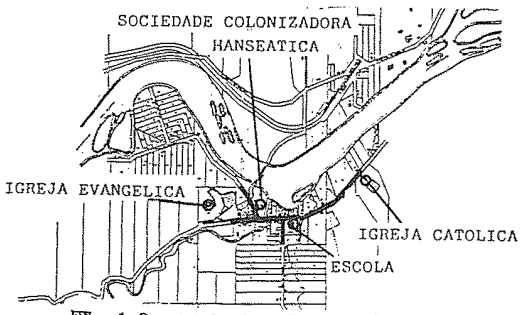
②伊、独系移民のつくった同じクラスの小都市においても、コミュニケーションの社会化の一般的傾向は同じである。しかし、行政サービスが支配的となる以前では、独系が会員組織のソシエダーデにつきあいを分散させた多核的な傾向をもったのに対し、伊系ではカトリック教会に収斂する単核型であった。この意味で日系移民都市のつきあいはむら社会の集団的階層型であった。

③比較対象のSA州イビラマ、RG州ガリバルジの初期のまちの形態は、図－１６に示すように、日系移民のそれと対照的であった。イビラマの場合にはHauptstrasseの両端近くにカトリック、プロテスタント教会があり、さらに古い原型では開発事務所付近をSdatplatz と呼んでいた。ガリバルジの場合には緩やかな丘の中腹に建てられたカトリック教会が中心施設であり、その周辺に公共施設が建てられていった。グリッド・パターンに近い市街地発展が当初からなされていた。

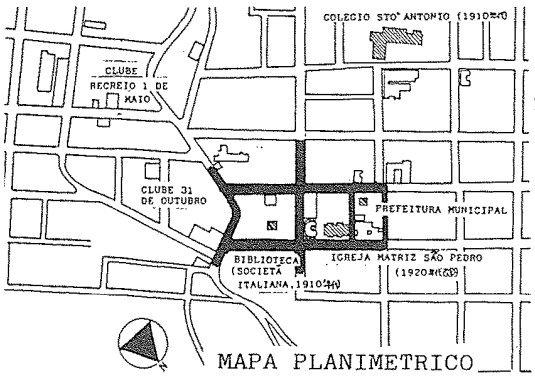
④都市環境の質をもしOECDの環境委員会の提案のように４つのConsernsで表現するとすれば、レジストロの場合、表－１のようなまちづくり、環境づくりの特徴がある。ここでは日本国内のそれとの差に注目したい。

⑤レジストロ開拓地の測量と地区割にたずさわった野村秀吉は、輪湖らとともにアリアンサ方面に転出した。アリアンサ、バストス、チエテ、アサイ、ウライという日系の計画的集住地の建設にあたって、野村の他に川合、鈴木、亀山ら何人かの土木関係者が市街地を設計している。アリアンサで採用された方形の街区をもつグリッドパターンの市街地割は理想的、理念的なものであり、それはバストスの初期区割プランに受け継がれた。しかし、実際には西端の開発地管理機能を持つ地区と小学校をむすぶ市街地中心軸が成長した。亀山がブラジル都市の観察ののちにつくったサンタ・イザベル・ド・イバイの計

画とレジストロの市街地計画との間に、「ブラ拓」幹部（梅谷）のチエテの初期計画イメージが位置していると言えよう。



図—16 Cidade Hammonia
(Ibirama,1931年)



図—17 DA CIDADE GARIBALDI (1976)

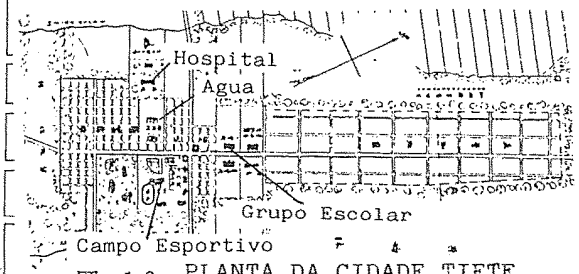
表—1 レジストロの都市環境とその整備

住環境	屋内	サーラと食堂の使いわけ
	屋外	区画が広く，低密度
	衛生	1950年代に水道施設整備.
	所有と取得	多い自己所有，価格高騰
都 市 サービス	商業	スーパー化，民間主体
	医療	低所得者のみ公的診察
	教育	高等教育を受けに転出
	余暇	小遊園地のほかになし
	交通	都市間バス路線以外は車
	勤務	職住近接，農業のみ長距離
生活環境	大気	問題不問，排気ガス重大
	水	下水地下浸透型，潜在的汚染
	騒音	喧しいが，感覚に差
	廃棄物収集	定日収集とダンピング
	災害	下町の浸水，避難のみ
	気候調整	暑く湿潤，冷房は将来の課題
	都市景観	系統的対策なし，博物館構想
社会環境	治安防犯	行政より社会的監視
	社会的多様性	大量の単純労働者の存在（伯人）
	文化環境	少数のクラブの形成
	近隣の構成	日本人会で世代間ギャップ

（参考文献）盛岡通、比較都市文化的にみた住居および住生活等の実態 —— 事例研究1－レジストロ、「ブラジル南部外国人移住地域における住文化変容に関する比較調査」（上田篤編）所収、昭和55年度科研費補助研究調査報告書、1982年

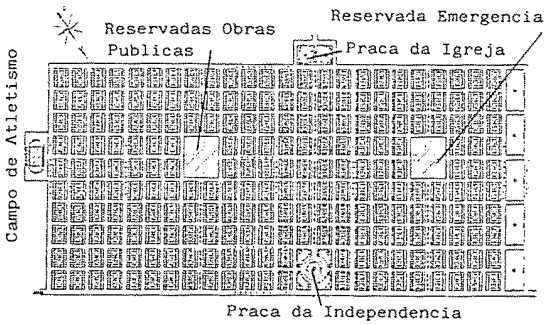
（バストス移住案内 1931年）

図—18 CIDADE DF BASTOS (1931年)



図—19 PLANTA DA CIDADE TIETE
(UMETANI,1930年頃)

図—20 PLANTA DA CIDADE DE ASSAI
(S.SUZUKI,1932年)



図—21 CIDADE STO ISABEL DO IVAI
(B.KAMEYAMA,1950年頃)